

令和7年度第1回朝日町総合教育会議 議事録

日 時：令和7年11月20日（木）13時15分～14時05分

会 場：朝日中学校 アクティブ・ラーニング室

出席者：朝日町長 笹原靖直

教育委員 澤木昇（教育長職務代理者）、
野坂真澄、勝田民、吉田尚史

教 育 長 木村博明

オブザーバー さみさと小学校長 大森祐子、あさひ野小学校長 米田歩

朝日中学校長 川田彰、

富山大学名誉教授 山西潤一、富山大学教授 林誠一

（富山県教育委員会）

小中学校課 主幹 山越哲也、指導主事 高田洋平

東部教育事務所 所長 能登一昌、次長・指導課長 團千加子
(町長部局)

総務政策課長 谷口保則、住民・子ども課長 金井玲子

事 務 局 (教育委員会事務局)

事務局長 加藤優志、主幹（生涯学習係長）寺崎三千代、

局長代理（スポーツ係長）水島雅樹、

学校教育係長 小川奈緒子、主査 松田健吾、

学校DX戦略推進WGグループ長 朝日中学校教頭 上田勝

会議次第：1 開 会

2 町長あいさつ

3 協議事項

(1) 「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実に向けた

授業モデルづくりについて

(2) 生成AIを活用した英語教育強化事業について

4 閉会

加藤局長：時間となりましたので、只今から令和7年度第1回朝日町総合教育会議を開会いたします。はじめに、笹原町長がご挨拶を申し上げます。

笹原町長：皆様、こんにちは。本日は、皆様と一緒に朝日町の教育に関して色々とまた議論をしてまいりたいと思っております。今日は、お忙しい中、山西名誉教授、林教授、本当にありがとうございます。小中学校の校長先生方にもご出席、誠にありがとうございます。教育委員の皆様方にも、日頃より大変お世話になっておりますことについて、この場を借りて感謝を申し上げる次第であります。今日は、ご存じのとおり、A Iを活用した英語教育の強化事業等々について議論を交わしながら、また授業参観の方もしていただきたいと思っております。さて、話は変わりますが、今月5日に、今、町が進めております部活動の地域移行について、国の方へ教育長と一緒に行ってまいりました。その折に、町の思いや意見を述べさせていただきました。いずれにせよ、皆様方とともに、未来を担う子供たちのためにどういった教育が必要なのかということを検討していく必要がございます。そのために私どもは、このコロナ禍の中でも、オンラインで双方向の教育ができるシステムの整備、また、部活動の地域展開など、様々な取組を進めてまいりました。これらの取組を成し得たのは、教育委員会の委員の皆様や大学の先生方のお力添え、そして、教職員の皆様のご理解とご尽力、P T Aの皆様方のご支援、あわせて県職員、教職員O Bの皆様方のお協力の賜物であり、これは朝日町の財産であり、強みであると思っております。このような取組をしっかりと皆様で進め、本日の会議が、その願いを担う子供たちに繋がるような場にしたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

加藤局長：本日はオブザーバーとして富山大学の先生方に出席をいただいておりますので、改めてご紹介申し上げます。朝日町学校DX推進アドバイザーであります富山大学名誉教授山西潤一様です。朝日町学校DX推進コーディネーターであります富山大学教授林誠一様です。そして、町内の小中学校からは、さみさと小学校大森校長、あさひ野小学校米田校長、朝日中学校川田校長の皆様にも参加をいただいております。また、本日は、富山県教育委員会、朝日町総務政策課、朝日町住民・子ども課からもご出席をいただいております。

本日はどうぞよろしくお願ひいたします。それでは、次に移ります前に、会議の進行につきましては、総合教育会議設置要項第4条第3項の規定により、町長にお願いしたいと存じます。よろしくお願ひいたします。

笹原町長：早速ではございますが、協議事項に移りたいと思います。その前に、今回の議題の趣旨について木村教育長より説明をいただきたいと思いますので、よろしくお願ひいたします。

木村教育長：皆様、ご苦労様です。教育長の木村でございます。今日は、「授業が変わる。子供が変わる。授業力改善プロジェクト」ということで、2つの取組についての検証結果について議論をしていただくことになっております。まず1点目でございますが、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実に向けた授業モデルづくりについての検証結果でございます。朝日町では、この未来の学びの実現を目指すために、子供たち一人一人が主語となる自由進度学習などの個別最適で探究的な学びを進め、先生主導から子供主導への学びと、全教職員が授業づくりの研修実践に取り組んでいます。その結果についての検証を行います。2点目は、生成AIを活用した英語教育教化事業の検証結果でございます。今年度、文部科学省の新規事業であるAIを活用した英語教育強化事業を活用し、子供自身がAIで学びを自己調整しながら対面での英会話向上を図る実践事業に小中学校が連携して取り組んでいます。その結果についての検証を行います。以上2点、よろしくお願ひいたします。

笹原町長：それでは、協議事項についてであります。1番の、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実に向けた授業モデル作りについて、朝日中学校上田教頭から説明をお願いいたします。

上田教頭：はい。朝日中学校教頭の上田でございます。どうぞよろしくお願ひします。朝日町では、未来の学びの実現を目指すため、授業力改善プラン及び教育DX推進プロジェクトを策定し、全教職員が計画的に研修実践に取り組んでいます。本年度の個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に向けた授業づくり研修計画について説明します。朝日町の3校の教職員が集まり、提案

授業を参観し、助言や講演を基に子供一人一人が主語の授業づくりを目指して研修を進めております。本年度は、春日井市教育委員会の水谷年孝先生、東京学芸大学の堀田達也先生、高橋純先生、そして昨年度より連携しております茨城県つくば市の先生方にご指導いただきました。また、本日お越しいただいております富山大学の山西潤一先生、林誠一先生にもご指導を賜っております。児童生徒の学びが自立的なものになるために、教師に求められることや授業づくりのあり方等を教えていただき、実践につなげているところです。そのほか、たくさんのアドバイザーやコーディネーターの先生方にも町の教育に携わっていただき、校内の研修でも助言をいただいております。

(動画視聴) これは、教員に向けてのアンケートの結果です。今年度の研修を通して、教員の意識や子供の姿に変容があったかどうかを全教職員にアンケートで問いました。その結果になります。まずは、教師自身の意識の変容についてです。研修を通して、今後求められる新たな教育についての理解が深まっていると回答した割合は 98 パーセントでした。クラウドを活用することによって、子供たちの学習状況を把握しやすくなっていると回答した割合は 97 パーセントでした。子供が主体となる学びを意識した授業作りに取り組んでいると回答した割合は 100 パーセントでした。次に、子供の姿の変容についてです。子供たちは、自らの課題を設定し、追究することにより、自律的に学習に取り組むようになっていると思うと回答した割合は 81 パーセントでした。子供たちは、クラウドや A I を活用することによって学び方の幅が広がり、自己調整しながら学ぶようになっていると思うと回答した割合は 93 パーセントでした。このように、教員の授業づくりに対する意識の高まりが授業改善につながり、少しづつ自律的に学ぶ子供の姿が見られるようになってきています。次年度に向けて、教員の意識の高まりが継続するよう、研修計画の見直し、作成を図っていきたいと考えております。以上で終わります。

笹原町長：上田先生、ありがとうございました。ただ今の事務局からの説明に対しまして、まずオブザーバーの校長先生方よりご意見をいただきたいと思います。はじめに、あさひ野小学校米田校長、お願いいいたします。

米田校長：あさひ野小学校米田でございます。今説明にありましたような授業を通して子供たちに目を向けますと、どの子供も自分に合った方法で意欲的に取り組む姿が見られます。これまで一斉授業ではいわゆるお客様のようにしていた子供たちも、自己調整しながら学習を進める様子が見られます。先生方の方に目を向けますと、県内外の先進的な取組に触れる機会を多くいただき、また、計画的に研修を進める中で、複線型授業は学びを確かなものにするという共通認識が広まり、まずはやってみようという前向きな姿勢が共有されております。以上です。

笹原町長：米田校長、ありがとうございました。次に、教育委員会の皆様よりご質問、ご意見をお願いいたします。それでは、澤木委員、校長のご経験を踏まえご自由にご意見賜ればと思います。

澤木委員：私見ですけれども、昔から教員の意識を変えるためには、良い授業をどれだけたくさん見るか。たくさん見ることによって自分の授業観が変わると考えております。先週、茨城県つくば市で行われました全日本教育工学研究協議会全国大会に、朝日町の3校より6人の先生が参加しておられました。このような取組は素晴らしい、いい授業をたくさん見ることによって先生方の意識が変わるわけです。いい授業を見ると、真似をして自分もやってみたいという気持ちになると思います。そういう観点からも、今朝日町が進めておられる、研修にたくさんの先生方を参加させて、そして新しいものを学んでくるという姿勢は素晴らしいと思います。そして、このアンケート結果にもありましたように、先生方も意識改革がどんどん進んできているということを感じ、私自身も嬉しく思う次第であります。ありがとうございました。

笹原町長：澤木委員、ありがとうございました。データの結果はすごい数値だなと思っております。もうお一方、吉田委員、中学校の校長も経験された立場からも、いろんなご意見を賜ればと思っておりますので、よろしくお願いいいたします。

吉田委員：よろしくお願いいいたします。例がいいかどうかわかりませんが、例えば家

電を買いに行ってAの製品とBの製品と迷うことがあります、その時店の方に「どう違うのですか。」と話しかけると、カタログを持って説明される方もいらっしゃいますが、中には、「いや、これはこんなふうに違うんですよ」とか「ここがとっても売りなんですよ」と説明される方もおられる。実際にその製品を使ってみた方の話はすごく力がありますし、「なるほど」と即決断することがよくあります。これと同様に、この新しい先進的な技術についても、何が大事か、その良さや便利さを知っている教員がどれだけいるかはとても大事になってくると思います。子供が新しい技術に慣れ親しみ、利活用する時に、やはり学びの伴走者である教師が、よくそれを知っていないと、なかなか利活用とか個別最適な授業に生かされないのではないかと思います。ですので、やはり意図的あるいは計画的に教員研修を積み重ねる中で、「やっぱりいいな」と、「こういう使い方をもっとやっていかなきやならないな」、「こうやってみよう」と、まず、現場の先生方が一生懸命その利活用を進めていくということが、ひいては子供の「やってみたい」とか、「学んでみたい」という気持ちに繋がっていくと思います。繰り返しになりますが、教員が「やっぱりこれいいな」という気持ちにさせていくための教員研修を、今、朝日町がやっておられます。この素晴らしい実践をより深めていただき、子供たちにもっともっとやってみたいという気持ちに火をつけてもらったら、より一層進んでいくのではないかと思っております。

笹原町長：吉田先生、わかりやすいお話、ありがとうございました。授業のモデル作りの中で、今後もさらに授業の改善につながるよう取り組んでいただければと思っております。それでは次に、2番の生成AIを活用した英語教育教化事業について、事務局から説明願います。

松田主査：はい。教育委員会事務局の松田と申します。よろしくお願ひいたします。ご説明させていただきます。今年度は、文部科学省の生成AIの活用による英語教育強化事業の指定をいただきまして、英語教育強化プランを実施いたしました。英会話アプリを授業または家庭学習で活用することにより、話す力、聞く力の向上を図るといったものになります。使用するAI会話アプリの特徴としまして、効果的かつ効率的な学習が実現できます。AIが評価、

採点し、フィードバックをしてくれます。AIとのロールプレイ、会話練習が可能といった特徴が挙げられます。実際にAIと会話の練習をしている様子をご覧ください。(動画視聴) こちらは小学校5年生の児童がやっているものになります。これは時間割りについて会話をしています。このような感じでAIと会話の練習を行うことができます。今画面に映っておりますのは、AIがその会話について評価、採点し、フィードバックをしたものになります。こちら、全体評価の画面になっております。次に、こちら、スピーキングの評価になるんですけれども、例えば、会話で、「私がパスタが好きです」と述べるのではなくて、「パスタが好きです、特にトマトソースのパスタが好きです」といえば会話に文脈が生まれますよというような、こういうコメントがフィードバックとして返ってきてている画面です。続いて、語彙力の評価になります。「too」を頻繁に使う代わりに、「also」「as well」などの表現を使ってみてはどうでしょうかというコメントが返ってきております。こちら、文法の評価になります。評価のコメントも否定的な表現ではなくて、こうすればもっと良くなりますといったような提案的なコメントがフィードバックとして返ってくることになります。AI英会話アプリの活用として、この3つのステップで今活用しているところでございまして、アプリで練習を行いまして、最終的には人対人の英会話の実践を行っております。このアプリを今年度6月から使用をしております。先ほども申し上げましたが、自動採点機能を持っておりますので、アプリを使用し始めた直後の7月と、しばらくアプリを使用して、しばらく経った10月にそれぞれ自動採点機能でスコアを測定しました。この資料は小学校で測定したものになります。小学校5、6年生115人を対象としております。資料にも記載しております高位層、中位層、低位層に区分をいたしまして、7月と10月に測定したスコアを比較しております。全体平均ではスコアが8.5ポイント上昇、80パーセントの児童のスコアが上昇しました。高位層、中位層、低位層においてもそれぞれスコアが上昇しております。特に低位層において効果が見られました。一人一人に応じた成績の伸びが見られたと分析をしているところでございます。こちらはAIを活用した授業についてのアンケートの結果でございます。授業が楽しくなったと回答した割合は91パーセント、自分のペースでできるようになったと回答した割合は88パーセント、伝え合う

ことができるようになったと回答した割合が 84 パーセント、書いたり書き写したりすることができるようになったと回答した割合は 79 パーセントといった回答でした。アンケートでは、児童からの意見も収集をいたしました。一部抜粋になりますが、A I について好意的な意見が多くありました。こちらは、先ほど小学校と同様に中学校で測定した結果になります。小学校ではスコアでの採点を用いておりましたが、中学校はよりレベルの高い A I との A I 英会話による評価となりまして、C E F R という学習者の言語レベルでの評価となります。資料にも記載してありますとおり、A1 から C2 のレベルがありまして、A1 の中でも A1-1 から A1-3 など細分化がされて評価がされます。中学校 1、2、3 年生 146 人を対象として測定を行いました。全体として 36.3 パーセントの生徒のレベルが上昇いたしました。こちらも一人一人に応じた成績の伸びが見られたと分析をしているところでございます。高位層、中意層、低位層においてもそれぞれ伸びが見られました。小学校では低位層に最も効果が見られましたが、中学校では中位層に最も効果が見られました。小学校と同様に、中学校においてもアンケートを実施しております。授業が楽しくなったと回答した割合が 84 パーセント、自分のペースでできるようになったと回答した割合は 80 パーセント、話すことができるようになったと回答した割合は 69 パーセント、書くことができるようになったと回答した割合は 70 パーセントでした。生徒の意見として、A I に好意的な意見がある一方で、高校受験を控えていることから、筆記試験に必要な単語または文法などの学習を重要視するといった意見もございました。このアプリを活用した測定結果の分析について、小中学校ともに全体で児童生徒のスコアレベルが上昇しました。小学校では低位層、中学校では中位層に最も効果が見られました。小中学校ともに、下降した児童生徒はおりましたが、極めて少ない人数でした。児童生徒のレベルに応じて調整が可能なため、個別最適な学びにつながりました。家庭での英語学習において、A I を活用することで自律的な学びにつながりました。フィードバック機能により、学習意欲、スピーキング能力の向上につながりました。A I と英会話ができることにより、英会話学習の機会が増えました。このように分析をしているところでございます。今回の測定結果を基に、今後、小中学校において各層に応じた指導を行うこととしております。以上です。

加藤事務局長：それでは、私の方から 1 点補足させていただきます。英語力の向上の部分で、小学校で 80 パーセント、中学校で 36.3 パーセントがアップしたと今説明がありましたが、中学校においては C E F R という国際標準規格を用いています。この C E F R は、成績に幅を持たせ、階層別に評価しております。例えば、何点から何点を A 階層というふうにしており、点数がアップしても、同じ階層だった場合は表面上横ばいになって出でてきます。ですので、今回レベルが上がった生徒が 36.3 パーセントと報告しました。これは、階層が例えば A から B に上がったとか、そういう方々が 36.3 パーセントおられた。例えば A から A に、点数は上がったが階層が同じだったという方々につきましては横ばいになっているということあります。実際、その同じ階層の中でも点数がアップした生徒もおられます。従いまして、小学校で 80 パーセント、中学校で 36.3 パーセントについて、中学生は低いのではないかと思われるかもしれません、そこは点数の付け方が違う、評価の仕方が違うということをご理解いただければと思いますので、よろしくお願ひいたします。以上です。

笹原町長：ただいま事務局からの説明に対しましてご意見をいただきたいと思います。オブザーバーであります、さみさと小学校の大森校長、よろしくお願ひしたいと思います。

大森校長：大森です。よろしくお願ひします。これまで一斉授業を行ってきていたわけですけれども、そこでは、全ての子供たちに合わせた学びを進めるということには限界がありました。工夫しなくてはいけないということを思っていたのですけれども、その打開策がなかなか見つからないという状態でした。理解の早い子にとってはその授業はつまらないものになってしまいますし、授業のスピードについていけない子にとってはとても苦しい時間になってしまふというのが現状でした。そこで、今回、生成 A I を活用することで、全ての子供が自分なりの速さで自分なりの学びを進められるように工夫をしました。そうすると、多くの子供たちが「わかる」とか「できる」という思いを持つことができ、自信を持って学習することができるようになったと思い

ます。データも示していますが、授業を見ている実感としましては、子供たちの表情が違っていますし、とても楽しく、充実した形で進めることができていると思います。そして、個別に支援が必要な子供への支援を先生がもっと時間をかけてできるようになってきています。そこが大変効果があると思っているところです。以上です。

笹原町長：大森先生、ありがとうございます。私も小学校に戻りたいという思いです。

引き続き、朝日中学校川田校長先生、よろしくお願ひいたします。

川田校長：よろしくお願いします。生成AIを活用した英語教育への効果は非常に大きいなと感じています。しかも、英語教育の可能性を広げるものだと感じています。説明があったとおり、大半の生徒はアプリを活用した取り組みやすさから、話すこと、聞くことへの不安や苦手意識が緩和されて、学びに向かう力、つまり学習の意欲が大変伸びて、大きな効果があったと思っております。また、手軽に個別最適な学びを保証できる、取り扱いやすいという部分から、授業のはじめには必ず導入活動としてAIと会話をすることを位置付けたことによって、練習量が増えて、着実に話すことと聞くことへの力が先ほどのグラフにあったとおり伸びたということでした。正直、私は、意欲は伸びるだろうけど学力はすぐには伸びないだろうと予想しておりましたが、それが結果として出ているということに驚きも感じています。また、家庭では意欲的にそれを使って、アプリを使って練習する姿も増えてきました。自分のペースで日常的に活用できるこの個別最適な学びのツールとして、これからもぜひ生徒の方に提供していきたいと考えています。

笹原町長：ありがとうございました。実は、私も教育長と一緒に、一昨日、中学校1年生の子供たちのAIを使用した取組を拝見させていただきましたが、大森校長が言われたように、我々の時代と違って、個々の能力に応じてやっているということに関して、子供たちがそれなりに楽しそうにやっていることに大変感心しました。このような状況を踏まえ、教育委員の皆様よりご意見を賜りたく、PTA関係の野坂委員より、よろしくお願ひいたします。

野坂委員：先日、さみさと小学校の授業を見せていただきましたが、子供たちがとても意欲的に取り組んでいて、会話をしたら即採点をしてくれることが、子供たちの励みになっていることがわかりました。また、AIからのアドバイスを自分たちの学びの糧にして次につなげていくことができれば、楽しさも、学力も伸びると思うので、今後、さらに広がってくと良いと思っております。今は英語に限られていますが、この生成AIの活用が、今後、他の教科の授業にも広がっていくことを期待しております。ありがとうございます。

笹原町長：ありがとうございました。それでは、同じく教育委員であります、様々な体験されておられる勝田委員より、グローバルな視点から意見をよろしくお願いします。

勝田委員：先ほど局長の方から、小中学校の英会話力の向上について、小学校と中学校では評価基準が違うということで説明がありましたが、それを踏まえた上で意見を述べさせていただきます。小学生は、自分のできることできないことを見て、このAI学習が面白いと思えば素直に学習、吸収します。楽しく学習していることが結果として大きなレベルアップにつながっていると思いますし、次への意欲につながっていると思っています。一方中学生は、現状では受験英語と日常英語が明らかに違っています。中学校ではそれを現実として意識せざるを得なくて、今まで楽しく学習していたその英語への親しみが、文法、語彙力を増やしていく中で薄れ、苦しいとか苦手だと思う生徒も一定数増えてきます。その結果、しっかりと目標を持っている生徒はいいのですが、そうでない生徒はそこに1つ壁を感じて、なかなかこの英語力のレベルアップということが難しいのではないかと思っています。ただ、受験を終えると大学や社会に出た時に必要となってくるのは、恐れない日常英語力、つまり聞き取る力と伝える力だと思いますので、生涯にわたり使える英語を身につけていくためには、どのように小学校から中学校、その先へスムーズにつなげていくかということが、これからAI活用英語教育の課題ではないかと思っています。以上です。

笹原町長：勝田委員、どうもありがとうございました。生成AIを活用した英語教育

が、子供たちの学習意欲や英会話スキルの向上に資するよう引き続き取り組んでいただければと思います。このあと、山西教授方からお話を伺うこととしておりますが、この会議が始まる前に、山西教授とお話の場があったのですが、先ほど言ったように、本当にもっとこのような英語教育を進めていたらよいと思います。私自身、ハワイに行った際に、コーヒーを頼んだらコーラが来た経験があり、自分のこれまでの英語学習が何だったのかなと思うことがあります。また他に、高校時代に、当時の英語の先生が外国の方が来られたときに英会話が何もできなかつたという衝撃的な思い出もございます。何のための英語の学びだったのかなと思った時に、これからどんどんグローバルに働く若い世代を築くには何が必要なのかということ。この後、山西名誉教授の方からいろいろなお言葉をいただけると思っております。どうぞよろしくお願ひいたします。

山西名誉教授：先生方が非常に積極的に取り組まれたことに、本当に敬意を表したいと思います。英語教育だけでなく全体にも。個別最適な協働的な学び、自由進度学習を進めるにあたって、やはり教師の意識改革にこれだけいろんな全国区のスタッフを揃えて啓発されたことがすごいことだと思います。なかなか先生方の意識を変えていくということは難しいと思います。そして、英語教育というと、私も今の町長と同じです。私の英語は場数だけです。世界を遊び歩いて少しはマシになる。要するに、これまでの英語教育は、文法中心であまり楽しくなくて、やらされ感満載なんですね。このコミュニケーションとしての英語は、いかに相手と会話ができるかということだから、A I のこのシステムは、非常にインタラクティブになっていて素晴らしい。だから、そういう意味で、まずデータを取っておられることもすごい。もう1つ言うならば、それぞれの子供にとってみたら、それぞれ向上目標、自分は「今ここだけど、こうなりたい」っていう、そういう意識でこれに取り組んで伸びる。だから、元々高い子はそれはそれでいいんです。伸びで先生方が評価してあげる、子供たちが評価する。やはり、達成目標って、今までこのレベルまでみんな行きましょうって先生は一生懸命頑張るけど、これぐらいでいける子もいれば、このレベルで終わる子もいるんです。でも、このレベルの子がこのレベルになる、やっぱりこの向上度が自分で実感できるってことが

大事だと思います。そういう意味では、それぞれのお子さんが向上目標を持って、C E F Rでいうと、自分が、A AからBとかBの何番とか、そういうふうに、それができたことに対して自分も評価する。あるいは人、先生、他のお友達はそういうところが素晴らしいなど。ただ、これは、自律的な学びという観点から言うと、いろんな仕掛けに新規性があると、最初は一生懸命やる。これは心理学の研究でノベルティ効果と言って、新しいものはとにかく一生懸命やればみんな成績が上がる。でも、これが継続できるかということと、この成果がいかに日常と繋がっていくかということが大事。中学生ぐらいだったら、例えばこの朝日町だったら宇奈月温泉も近いから、外国人に自分たちの英語で宇奈月を紹介するとか。要するに、学んだ英語を使う場面、このコンピューターの中だけの世界からリアルな世界に繋げていくことが大事だと思います。それで、リアルな世界で「失敗しちゃった。じゃあもう一度勉強し直す。」私もよく海外に出かけますが、文法はぐちゃぐちゃ、間違いがいっぱいです。そういう意味では、文法は確かに大事だけど、相手も理解してくれようと思うから、形が違っていても、ちゃんとお互い通じ合うんですね。だから、本当の学び、そういう意味では、主体的で対話的で深い学び、最後の深い学びというのは、その学んだ成果がいかに日常に繋がっていくかという、そういうことを経験させ、実感することが深い学びにつながるんだと思うんです。そういう意味では、ここはいい環境にあるんじゃないかなと思います。これからグローバル人材を育てるという意味で、A Iのこのシステムの中だけで閉じないで、そういうリアルな場を作ることと、もう1つは、それぞれが向上目標をどう達成したかということがリフレクションというか、自覚できるようにしていくということが大事かなと思います。いずれにせよ、とにかくこれだけのエネルギーをかけてやっておられる町長とか教育長はすごい。自律的な学びをするためには、「今ここからこういうふうにやっていけばゴールに行くよ」っていう単元の目標があったら、それを子供たちに見えるように可視化することが大事。つくばで私が指導した学校では、ラーニングマウンテンという概念で、この山の頂上に何のために登るのかを明確にして、そのためには、今、自分は山の麓にいて、どんなふうに登っていけばゴールにたどり着けるか。それは全ての教科につながる。英語もそうです。最終的には、グローバルな方々、世界で活躍できるのがゴール

だと思うんです。そういうふうにして、子供たちに自分の学びが見える、実感できるそういった場を作っていくことが大事です。すごい可能性があると期待しています。ぜひ頑張ってください。

笹原町長：山西名誉教授、ありがとうございました。林先生、是非、授業の改善や教師の意識改革と合わせてトータル的によろしくお願ひします。

林教授：私は、「これはダメだ」とか「これはなくせ」とかみたいな会にもよく呼ばれるんですけど、朝日町に今日も1時間半かけて来ましたけど、なぜかしらワクワクしてくるのは不思議だなと思って。いや、本当にそうなんです。何かこう、辛いとか、なんか言わんなあかんという感じじゃなくて、ここへ来るのが本当に楽しみで、そうやって来ています。それはなぜかというと、何かこう、新しいものができる、何か新しいものに触れられる、それが見られるという感じがずっとあるんです。これは素敵だなと思って。多分それは町も教育委員会の皆さん、もちろん学校現場の先生や生徒も同じ方向で、こう変わっているこう、新しいものを作っているこうという、そういう動きがあるからだろうなというふうに思います。3か月に1回ぐらい、今も文部科学省に行っていますが、土日もずっと会議だらけです。次期学習指導に向けて教科ごとのワーキングが立ち上がって、会議がパンパンな状態で詰まっています。目前にいろんな大きな改革が控えていますが、大きく変わることを大変って書きますよね。大変なんです。そのとおり大変なんでしょうけど、この一体的に取り組むこの朝日町の動きは僕も好きですし、多分それが魅力となって動いているんだろうと思います。ところで、学習指導要領で言うと、ここ30年、実は、背景の一番トップの文言に同じ言葉が並べられているんですけど、学校の先生方知ってらっしゃいますか。ここ30年、つまり3回変えて全く同じように進んでいますし、多分、次期改定もそうだと思うのですが、一番最初に括弧書きで『生きる力』って出るんです。これ、平成10年改訂で作ったんです。ところで、平成10年はどんな時期かというと、日本の人口がここからガ一っと下がっていく時期で、その直前に出したんです。簡単に言うと、我々が受けてきた教育は、同じ教室で一律に同じことを、間違いなく教科書のことを教える教育でしたけど、日本の人口がガ一っと減っていく中で、

これからの中学校教育、大きく変わりますよと。ちなみに生きる力の前にどう書いてあるかというと、『自ら学び、自ら考えるなど生きる力』と書いてあります。今日の朝日町のトップに書いてある一番上の文言がそのままですよね。あちこちで言われますけど、自ら学び、つまり子供自身が自ら求める、主役は子供たちである、そういう授業の変革の時期にあって、それを率先して取り組んでいらっしゃる。もちろん、ICT、生成AIを使ってこれから子供たちはその中に入っていますから、これが、この朝日町の教育の素晴らしいところだし、改定を目前にした全国の本当にいいモデルになる、そういう取組であろうかと私は感じます。ぜひ、この一体感、ここに来たら、「一緒にみんなでやりましょう」みたいな感じを私は感じますね。これはとてもいいなと思うんですけど、このまま引き続き続けていっていただいて、全国に良いメッセージをぜひ出していただければと思います。以上です。

笛原町長：林先生、ありがとうございました。山西名誉教授、林教授、ありがとうございました。そして、皆様、本当にありがとうございました。未来を担う朝日町の子供たちにこういったものをしっかりと、いい形で伝えていていければというふうに思っております。以上をもちまして、本日の協議事項を全て終えさせていただきます。本日は誠にありがとうございました。進行をお返しします。

加藤事務局長：ありがとうございました。これを持ちまして、予定しておりました協議事項は全て終了いたしました。なお、本日皆様方に配布しました資料の中にCHIeru Magazineという冊子が入っております。これは、学校教育現場のICTに関する全国の学校を対象とした情報誌で、全国の学校に配布をされています。本日配布しましたのはその最新版で、その中には次期学習指導要領に向けて着実に準備を進めている事例として朝日町が紹介されています。付箋が貼られたページから朝日町の取組が掲載されておりますので、是非ご覧ください。それでは、これをもちまして令和7年度朝日町総合教育会議を閉会いたしますが、この後は、本日の公開授業につきまして、朝日中学校上田教頭よりご説明申し上げます。

上田教頭：よろしくお願いします。本日 2 時 10 分より授業を開始したいと思いますので、少しお時間をいただき、本日の授業についてのお話をさせていただきます。この英語教育教化事業の指定を受けて、朝日町では「英語力アップ」を合言葉に授業づくりを軸とした研究に取り組んでまいりました。本日公開授業公開する授業につきましては、教科指導×教科横断的・探求的な学習×生成 A I をキーワードに授業のデザインを行いました。本日は単元名『We are the Ambassadors!』～朝日町のよさを英語で伝えよう～という単元を構成しました。1 年生のこの単元は、3 単元の「s」を習うところであり、自分の身の回りのことを伝える単元であります。この教科のねらいと町独自の教科ふるさと科と関連させまして、教科横断的、探究的な学習も組み込んでおります。これに生成 A I を掛け合わせて授業のデザインを行いました。ここで本日の授業における私たちの手立てについて説明します。まず 1 つは、生成 A I の活用であります。『E L S A タイム』という名前を付けまして、毎時間の帯学習で活動しています。体育の授業に入るときに、グラウンド走るようなイメージで、準備ができた生徒からそれぞれの活動をしていきます。本日はここに書いてあるような活動を生徒が自分でセレクトしながら学びを進めます。ロールプレイをする子もいれば、今日発表する資料を音読練習する子もありますし、教科書の単語練習をする子もいます。この時間帯には自分がしたい活動を取り入れて英語力の向上に努めています。2 つ目の手立てとして、クラウドの活用と、学びのスケールの活用です。今ほど山西先生からおっしゃっていたラーニングマウンテンのようなイメージで、今自分は何を勉強していく、次どこを目指して、どこに立ち戻ればいいか。このような学びのスケールを作り、何を学ぶ、どこがゴールかを明確にしながら学習を進めています。そして、誰と学ぶかということも大事にしています。本日、生徒は自分のカードを持っています。1 人で学習を進めたい子は黄色のカードを机の上に提示しています。生成 A I と学ぶ子は緑のカード、友達とやる子は青のカード、先生とやる子は緑のあと桃色のカードを出して、それぞれ今はここ、次はこことかというような形で自分の学びの確認をしながら、そして教師もこれを把握しながら学習を進めています。3 つ目です。人的資源のフル活用でございます。今年度、本校ではチームティーティングを充実させております。これは富山県教育委員会様、町教育委員会様のご尽力を賜りまして、外

国語科では毎時間TTを実施する人材を配置していただいております。校内の人的資源をフル活用して、英語力及び確かな学力の定着に努めてまいります。本日は隣の教室で授業を見ていただき、改めて色々とご指導をいただきたいと思っております。以上で本日の授業についての説明を終わります。本日はどうぞよろしくお願ひします。

加藤事務局長：よろしくお願ひします。それでは、公開授業につきましては、今ほど申し上げた通り、午後2時10分より隣の会議室において1年生の公開授業が行われます。間もなく開始となりますので、皆さんご移動の方よろしくお願ひします。本日はどうもありがとうございました。